

《第 478 回 (2021 年 1 月 14 日) 子どもの本の読書会記録》 参加者：8 人 文書参加：1 人

時間：10:00~11:30 場所：オーテピア 4 階集会室

『朔と新』 いたう みく / 著 講談社

一年ぶりに実家に帰ってきた十九歳の兄、朔^{さく}。弟の新^{あき}は、久々に会う兄との距離感を掴めずにいました。朔は二年前、新とともに搭乗していたバスの事故が原因で全盲に。そして、そのバスに乗る要因を作ったのは新だったのです。事故の後、朔は盲学校へ入学し、新は朔への償いのため、打ち込んでいた陸上を辞めていました。

そんなある日、朔が新を誘ったのは、視覚障害者が伴走者とともに走る競技「ブラインドマラソン」。朔は走者として、新は伴走者として挑戦していくのですが、家族同士ならではの嫉妬や恨み、甘えや卑屈さも徐々に表面化していき……。

兄弟という関係も、走者と伴走者の距離も、近いからこそ上手く立ち回るのは難しい。ひりつくような本心をさらけ出し合いながらも、お互いが成長し、兄弟の関係性を深めていく様子が描かれた物語です。

次に、読書会に参加された方々の感想を紹介します。

●世相を反映したテーマ。事故がなければ、兄弟がここまで深く交流することはなかっただろう。「誰が悪い」ということはないが、考えさせられた本。親にとっては育てやすい朔と、手がかかる新。兄弟と母親の関係性がよく見えた。朔の、頭ではわかっている、気持ちが付いていかない様子も正直に描かれていた。

●きれいなストーリーだなと思った。朔の周囲にも理解者が多い。物語の中で描かれていた、見えない人が遭遇するであろう困りごとに関心を持った。例えば、外出先のトイレで苦勞することなど。自分もいつ、障害を持つか、介護をするか分からない。自分とは違うものを受け入れられる世の中でありたいと思う。

●兄弟の、十代らしさを感じる細かいエピソードが好きだった。新には、こどもと大人の間地点にいる世代特有のめんどくささがあると思ったし、朔も実はかっつけて、こどもっぽいプライドを持っている。この兄弟は、今後すごく仲良くなるわけではないと思うが、いい関係性を築いていけるかなと思えるラストだった。

●朔と新の母親が、最後まで救われていないように感じた。伴走者は、景色や周囲の状況を口にしないと、走者に伝えられない。新は、兄弟だからという気持ちもあってか、朔にニュアンスだけで伝えていたところもあった。競技をきっかけとして、家族の生き方を描きたかったのかな。

●児童文学と純文学の違いを認識した。弟と、視覚障害のある兄との関係は、以前芥川賞の候補作にも描かれていた（『ラッコの家』古川真人 文藝春秋）。『朔と新』は児童文学なので、人物の心の内側の描き方などが、このくらいで抑えられているのだろう。現代の理想が描かれていると感じた。明るくまとめられていた。

●どうして朔は、最後に自分の本心を新に言ってしまったのか。二人の新たなスタートのためには、ここで言うておく必要があったのかな。いたうみくは、様々な深いテーマを分かりやすく描く作家。兄弟のこれからの関係性が気になる。続きがあったら読んでみたい。

●朔と新の周りの人物がいい。藤崎や内村など、諦めずに声をかけ続けてくれる存在っていいなと思った。もし自分だったら、一回で諦めてしまうだろう。いい話で終わるかな…と思ったが、朔にも割り切れない気持ちがあることが最後に分かった。複雑に変化する登場人物たちの気持ちがよく描かれていた。

●まず、この母親はきらい。次に、朔はいい子の役割を果たしすぎ。そして、反抗期の新は、問題ありだけど、なぜか同調。朔も新も、自分自身の嫌なところをきちんと見つめて、それを抱えたまま変わろうとしている。子どもってすごいなあ。成長するなあと、嬉しいラストだった。

次回 2月4日(木) 10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室
□『シェルパのポルパ エベレストにのぼる』石川 直樹 / 文, 梨木 羊 / 絵 岩波書店